後　　記

1. 実践哲学を再び哲学の主要テーマとして取り上げようという動向が近年顕著になりつつある。かかる思潮を鑑み，本会はここに『実践哲学研究』を発行する。
1. 実践哲学研究といってもその対象とする領域は広大多岐ではあるが，われわれ（京都大学倫理学科大学院生）は自らの研究を公けにすることによってそれぞれの領域から公正なる批判と判断をあおぎ，各自の問題意識を深めると同時に相互の交流を計ることを目的とする。
1. 本研究の発刊は必ずしも順調になされたのではない。森口・西谷両先生及び先輩諸氏に多大なるご迷惑をおかけしたのではないかと恐れる。ここに両先生ならびに先輩諸氏に深き感謝の意を表するものである。
1. 本会は機関誌『実践哲学研究』の発行の他に各種研究会を開催している。（現在は週1回の輪読会を行なっている，テキスト； S. Kierkegaard, Philosophische Brocken; P. Ricœur, Le conflict des interprétations, essais d'herméneutique）

（K. M.）

発　行　　53. 9. 15
京都大学文学部倫理学研究室内
実践哲学研究会
事務局
京都大学大学院文学研究科哲学（倫理学）
大学院学生共同研究室
印　刷
昭和堂印刷所
京都市左京区百万遍電停前東側
TEL (075) 721－4541～3

実践哲学研究

創刊号

京都大学文学部倫理学研究室内
実践哲学研究会

目　　次

刊行に寄せて　　森　口　美都男

ベルン時代におけるヘーゲルの《自由》概念

安　彦　一　恵 …… 1頁

現代哲学における課題と方法

柴　田　　秀 …… 21頁

divertissement を超えるもの

—パスカルの概念を手がかりとして—

大　町　　公 …… 43頁

後　　記